- 9 人体寄生頻度の高いマダニ属の同定法
内川 公人 (信州大・医・寄生虫学)
How to identify *Ixodes* spp. that bite man often
Kimito Uchikawa

臨床家から、さまざまな状態の標本についてヤマト、シュルツェ、タネガタ、ヒトツツゲの各マダニの同定依頼を受ける。各種の背面からみえる分類形質には、胴体部や脚の色調、背板の概形、胴体部の剛毛の数と性状、脚の太さ、などがある。また、脚基節の棘と紋様などは腹面に具わる分類形質である。頸体部には口下片の形態と歯式、触肢の概形などの分類形質があるが、実際には頸体部をみないで同定を済ませることが多い。依頼される標本に含まれる著しく破損した標本についても、何れかの分類形質を探して、種の同定に到達する。虫体の大部分が失われ、頸体部または口器だけが残る皮膚片が提出される場合には、KOHで溶融して残存虫体部を分離し、口下片の形態と歯式によって同定する。口下片が欠如するときには、鉸子の外分節external articleの形態をみて同定すればよい。

- 11 埼玉県におけるフトゲツツガムシとタテツツガムシの分布および年次変動
○浦辺研一・高岡正敏・山本徳栄・中澤清明
(埼玉県衛生研)
Distribution and yearly abundance of
L. pallidum and *L. scutellare* in Saitama.
Urabe K., Takaoka M., Yamamoto N., and
Nakazawa K.

1988年から1997年までの春と秋に、県全域を対象に、河川敷を中心とした61地点でツツガムシ調査を行った。

未同定種を除き5属14種65,349個体のツツガムシが得られ、フトゲツツガムシが最優占種で全体の57%、次にタテツツガムシが14%を占めた。フトゲは平野部から山間部まで32地点で確認され、タテは平野部の河川敷14地点でみられた。四分表を利用して両種の分布を比較すると、両種はわずかに相伴って分布する傾向があった(連関係数:0.27)。

また、浦和市郊外の荒川河川敷における定点調査の結果、ネズミから分離されたフトゲ個体数は、短期的な変動が大きいものの、長期的(10年間)にはアカネズミ1匹あたり毎年5~6匹ずつ増加する傾向を示した。

- 10 同定依頼検査よりみた千葉県におけるマダニ被害
○角田隆・森啓至・藤曲正登(千葉県衛生研究所)
Tick-caused injury on the evidence of identification in Chiba Prefecture Takashi Tsunoda, Keiji Mori, and Masato Fujimagari

平成2年から9年までの同定依頼検査のうち、マダニ科の依頼は8件あった。依頼内容は、ヒトへの咬着が2件、衣類への付着が2件、ペットへの寄生が1件、ペットからの家屋内への持ち込みが2件である。依頼者は全県に及び、北西部の住宅域においても苦情があった。同定された種はすべてフタトゲチマダニであり、発生時期は6・7月と9・10月であった。発育期の内訳をみると、6・7月の事例は若虫と雌成虫であり、9・10月は若虫と幼虫である。これまでの調査からフタトゲチマダニとキチマダニが有害種と考えられたが、2種のうちフタトゲチマダニだけに偏った原因について今後さらに検討する必要がある。

- 12 野外調査によって明らかにされたヒトツツゲマダニとヒゲナガチマダニ成虫の季節消長の類似性 藤本和義(埼玉医大、医動物)
The similarity of the seasonal activities of *Ixodes monospinosus* and *Haemaphysalis kitaokai* adults (Acari: Ixodidae) clarified by an analysis of field study Fujimoto K.

ヒトツツゲマダニとヒゲナガチマダニ成虫の季節消長を秩父山系熊倉山においてマーク法を使って解析した。1997年春(4~6月)に全部で77頭のヒトツツゲマダニと201頭のヒゲナガチマダニを採集し、油性ペイントでマークを付けて放した。しかし、1997年秋(9~11月)に採集した17頭のヒトツツゲマダニと263頭のヒゲナガチマダニはすべて無マーク個体であった。一方、1997年秋に採集されたマダニの内、ヒトツツゲマダニ1頭とヒゲナガチマダニ13頭は1998年春(4~5月)に再捕獲された。再捕率はヒトツツゲマダニで5.9%、ヒゲナガチマダニで4.9%であった。以上の結果はヒトツツゲマダニ、ヒゲナガチマダニとも春と秋に出現する成虫は同じ個体(すなわち同じ世代)ではないが、秋と翌年の春に出現する成虫はすくなくとも部分的に同じ個体(すなわち同じ世代)であることを示唆する。